

子どもと戦争：日系オランダ人の口述史

川崎, 暁子[訳] / Ezawa, Aya / 江沢, あや / Kawasaki, Akiko

(出版者 / Publisher)

法政大学大原社会問題研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

大原社会問題研究所雑誌 / 大原社会問題研究所雑誌

(巻 / Volume)

646

(開始ページ / Start Page)

32

(終了ページ / End Page)

52

(発行年 / Year)

2012-08-25

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00008937>

子どもと戦争

——日系オランダ人の口述史

江沢 あや／川崎 暁子 訳

戦争は、多様な形で家族や子どもに貧困と困窮をもたらす。しかし、戦争がもたらすのは悲惨な経済的困窮だけではなく、家族を引き裂き共同体を解体することによって、社会のおよび精神的な側面でも深刻な事態を引き起こす。最近の研究により、特に年少の子どもである時に戦争を経験した人ほど、その後何十年も戦争中の経験によって影響を受けること、そして戦争のトラウマが世代を超えて受け継がれること、が分かっている（例えばBode 2004参照）。戦争中の物質的および社会的欠乏は、現在における彼らの人生の重要な一部を構成しているのである。

本論文においては、戦争中の経験およびその長期にわたる影響を、「敵の子ども」という観点から探求する。戦争中に、敵国の男性—多くの場合は兵士だが、民間人も含まれる—と現地の女性との間に生まれた子どもは、戦争中に経済的困窮に苦しむだけではなく、人生を通して、対立の歴史という重みを背負うことになるのである。戦争中の対立関係によって、彼らは共同体から追放され、家族からも拒絶されることが多く、彼らの存在は私的および公的な言説において黙殺される。彼らの境遇は、彼らの人生のあり方にどのように影響するのだろうか？ 「敵の子ども」として生きていくことはどんな意味をもつのだろうか？

これらの問題を探求するために、本論文においては、日本による（旧）オランダ領東インドの占領期（1942-1945）に、蘭印系（ヨーロッパ-インドネシア家系の）母親と日本人の父親の間に生まれ、その後はオランダに定住している日系オランダ人の子どもたちの口述史を検討する。日本による旧オランダ領東インドの占領中におけるオランダ人植民者および一部の蘭印者の強制収容、そして戦争中の日本の残虐行為により、蘭印者と日本人の間に生まれた子どもたちは、戦争によって傷つけられ、また日本による強制収容というトラウマを背負った共同体において育っていくこととなった。彼らは多くの場合、自分たちが日本人の血を引いていることを人生の後半に至るまで知ることがなく、多くの日系オランダ人は自分たちの日本人の父親をめぐる沈黙と秘密につきまといながら生きていくこととなった。共同体から、そして多くの場合家族からも居場所を追われた彼らの口述史は、「故郷」や「懐かしい国」としての共同体や、時には家族という帰る場所もなくなるような度重なる追放という条件下で、人間の出自とアイデンティティがどのように語られるのか、という問題を提示している。ある人の過去—この世に生を受けた経緯、そして家系—が家族の秘密であり、歴史的な緊張状態と深く関わっている場合、その人の口述史はどのように語られるのだろうか？ それが彼らのアイデンティティにどう影響するのだろうか？ 1944年から1946年の間に旧

オランダ領東インドで生まれた日系オランダ人20人に対して筆者が行った口述史インタビューに基づき、本論文では、戦争状態にある国と国の間で生を享けたことが及ぼす長期的な影響と共に、対立の歴史に根をもつアイデンティティを確立することの困難を考察する。

国家、記憶、アイデンティティ

戦争によって生まれた子どもたちの経験の中心をなすのは、彼らのアイデンティティが、歴史と戦争中の暴力との対立関係の記憶に、密接に結びついているということだ。つまり言い換えれば、国家間の対立と、その対立が国家にとってどのように記憶されているかは、国家政策や歴史だけの問題ではなく、個人の人生とアイデンティティにも影響をおよぼすのである。

現代の国民国家に関する理論は、歴史と記憶そして国家という共同体のこうした関係性について、説明を提供している。Ernest Renan (1996) が論じたように、国家は単に国境や言語または地理によって統一されているわけではない。むしろ統一というものは、国家としての意識の高まり、歴史観や記憶そして忘却の共有、共通の未来へと共に向かうための目標などによってつくられる。こうしたアプローチに基づき、Benedict Anderson (1991) は、国家というものが「想像上の」共同体を構成していると論じた。重要なのは、国家の構成員たちが、国家という目には見えないがより大きな共同体に、自分も所属しているのだと感じられるかどうか、である。このような国家意識は、国営メディア、共通言語などによって高められ、そして博物館に飾られている国家の歴史を記録した展示物や、国家的な建造物などといった象徴的な表現によって可視化される。

国家規模の言説や国家的な建造物として表現される戦争の記憶は、このようにして、国家としての統一性の重要な根源となり、想像上の共同体を創り上げる上で重要な役割を果たす。敵国に属する人間と親密な関係をもった女性たちは、言うまでもなく、戦争中の敵対的な行為に関する国家的な記憶に対して、深刻な挑戦を投げかけることになる。彼女たちによる「敵」との親密な関係は、戦争に関する敵意をかきたてるような言説（われわれvs.彼ら）を混乱させるだけでなく、想像上の共同体が拠り所とするジェンダー化された秩序をも揺さぶることになる。国家というものの表現の仕方は、しばしば非常にジェンダー化されている（Parker, Russo, Sommer and Yaeger 1992）。例えば戦争中の記録は、男性を「父なる国」を守る兵士として描き、女性を国家の「再生産」を担い、犠牲となった夫や子どもたちを思って嘆き悲しむものとして描き出す（McClintock 1996）。戦争中の敵国の兵士による女性へのレイプは、女性に対する暴力的な行為としてだけでなく、象徴的に、国への「レイプ」と、国家の身体をそれから守ることができなかった男性たちの失敗として表現される。よって敵国の男性と性的な関係をもったと思われる女性は、国家において女性に与えられている役目を果たさなかつただけではなく、国家の身体を敵国に差し出した裏切り者と見なされるのである。よって、女性のパーソナルで親密な経験は、家父長的な国家の国境に挑戦を投げかける、非常に政治的な問題なのである。戦争中の親密な経験は、私的な問題というよりも、むしろ政治的に重大な意味を付されるものとなり、その重荷は彼女たちの子供にまで受け継がれるのである。

このようにして生まれた子どもたちは、戦争に関する記憶がほとんどない場合が多いにもかかわ

らず、戦争中の敵国による残虐行為を思い起こさせるものと見なされる。敵の子供として、彼らは父親の行為に関する罪悪感と恥をもつことになる (Ericsson and Simonsen 2005)。彼らの存在は、統一を表す想像上の共同体としての国家にそぐわず、そればかりか対立の時代においてさえ愛情がありうるということを示している。彼らの存在はこうして、国家としての戦争の記憶と密接に絡まり合ったものとなる。国家の統一のための国家としての記憶が、敵のイメージを中心として形成されている場合、子どもたちは自らの境遇に関して罪悪感をもつこととなり、国家的な共同体から追放されるのである。反対に、これらの子どもたちのアイデンティティや存在を認めることは、戦争中の敵対関係や、想像上の共同体としての国家の国境線に、疑問を投げかけることとなるのである。このような状況下で、子どもたちは自らのアイデンティティをどのように形成し認めればよいのだろうか？

日系オランダ人の口述史は、対立の歴史が、自己に関する意識に対して与える深刻な影響を明らかにする。彼らの場合、自分が誰なのかということを探し出すための奮闘は、国家的、民族的、または文化的な歴史や起源を発見するといったものではなく、むしろ自分のアイデンティティを確立するための奮闘としての、戦争の意味と記憶をめぐる交渉なのである。この考え方に沿って、以下、まず最初に第二次世界大戦中の蘭印者と日本占領軍との遭遇の歴史と記憶に関して鍵となる観点を提示し、次に日系オランダ人がどのように自分のライフストーリーを語り、日本による占領下の記憶の中で自分たちをどのように位置づけるのかを探求する。

蘭印社会とオランダ領東インド

日系オランダ人のライフストーリーの中心を占めるのは、彼らの蘭印社会との関係と、日本による旧オランダ領東インドの占領である。蘭印社会は、最初に東インドで、後にはオランダで、彼らが育った社会的コンテクストを構成するだけでなく、その共同体がもつ戦争の記憶とトラウマが、彼らのアイデンティティをめぐる葛藤に広範囲にわたるコンテクストを与えた、想像上の共同体でもある。つまり、(1944年から1946年の間に生まれた) 日系オランダ人たちは、占領の記憶を持つには若過ぎたにもかかわらず、彼らの子供時代は蘭印社会が共有する戦争中の記憶で満ちあふれ、それらの記憶が彼らの存在意義の形成に深くかかわっていたのである。

蘭印者、つまりオランダ語でIndischと呼ばれる人々は、彼らの植民地人としての出自によって定義された。厳密に言えば、蘭印者とは、旧オランダ領東インドで生まれたオランダ国民、と定義される。植民地時代を通して、現地の女性との国際結婚が一般的であったため (Bosma and Raben 2008)、全てではないがほとんどの蘭印者は、アジア人としての出自も持っていた。蘭印者は、20世紀には植民地人口のかなりの部分を形成しており、また国際結婚も引き続き一般的であった。例えば1925年には、旧オランダ領東インドにいるヨーロッパ人の27.5%が、現地人もしくは混血者の配偶者をもっており、その割合は1940年まで20%を保っていた。公式にヨーロッパ人という身分にあったのは22万人に過ぎなかったが、いくつかの調査によればインドネシアの住民9,000万人のうち800~900万人もの人々が、祖先に一人以上のヨーロッパ人がいたという (Gouda 1995)。

他国の植民地社会においても国際結婚は珍しいことではなかったが、旧オランダ領東インドは、

父親から認知された子供をオランダ市民と見なす点において、珍しかった。つまり、彼らの「ヨーロッパ人」としての法的な地位は、肌の色に関係がなかった。父方の家系とヨーロッパ人としての法的な地位により、少なくとも表面上は、彼らの肌の色は問題にならなかった（Gouda 1995）。彼らは最も高い階層を占めることは決してなかったが、こうした待遇により、彼らは植民地社会の一員としての実感をもつことができた。彼らは現地政府の一員として働いたり起業したりし、オランダからの東インドへの軍人の派遣が減った1939年からは、多くの者が東インドに駐留するオランダ領東インド軍（Koninklijk Nederlandsch-Indisch, KNIL）に志願し、日本との戦争において重要な役割を果たした（Meijer 2004）。

日本の占領下の旧オランダ領東インド

1942年1月の日本による攻撃とそれに続く旧オランダ領東インドの占領は、植民地社会に深い傷跡を残した。日本による旧オランダ領東インドの占領の歴史と記憶の中心をなすのは、単に国としての主権の喪失、軍事関係者の投獄と行政機関からのオランダ人および蘭印者の排斥だけではなく、むしろ女性や子供をふくむ民間人が、日本による占領中、強制収容されたことである。最新の推定によると、およそ99,000人の蘭印・オランダ人の民間人が、日本による旧オランダ領東インドの占領中、強制収容されていたという（Bosma, Raben, and Willems 2006）。強制収容された民間人は3年間、収容所で厳しい生存条件に耐え、戦争捕虜は泰緬鉄道建設のための強制労働、および日本の炭鉱における強制労働をさせられた。死亡率は高く、多くの人々が栄養失調や医療品不足、病気や極度の疲労が原因で収容中に命を落とした。このように、戦争は、最前線で闘う兵士たちが直接に経験したというだけのものではなく、3年間に渡る民間人の強制収容がもたらした厳しい統制と物質的な剥奪という苦しみがトラウマとして記憶に刻まれたのである。

強制収容政策は、オランダで生まれたオランダ市民と現地で生まれた蘭印者を区別することによって、共同体における軋轢をも生み出した。強制収容政策は当初、主に純粋なオランダ人に対するものであった。対照的に、東インドで生まれた蘭印者は、アジア人としてのルーツを部分的であれもっているとみなされ、強制収容政策からは免除され、また自らをアジア人として同盟の一員とみなすよう奨励された。しかし、多くの蘭印男性が蘭印軍に入隊させられていたという事実により、彼らは植民地政府と共犯関係にあるとみなされ、日本への降伏後は、蘭印軍の一員であったとして強制収容の対象となった。第二次世界大戦以前の彼らの業績は、今や責任を取るべき理由となり、彼らは植民地政府における地位から追われることとなった。つまり、蘭印者が、植民地において軍や政府の要職に就くことができたが故に、また「ヨーロッパ人」としての地位を与えられていたが故に、蘭印者は、日本による占領とともに、部分的であれ強制収容の対象となったのである（Bosma, Raben, and Willems 2006）。

しかし、強制収容政策が激化してもなお、蘭印者の一部が強制収容から免除されていた。強制収容の対象となったのは主に男性であり、蘭印女性および子供の大部分は、収容所の外に残されることとなった。しかし、収容所の外の暮らしも決して楽なものではなかった。ほとんどのオランダ人男性および蘭印男性が収容されたため、蘭印女性たちは収入源を失い、それまでほとんど世帯の経

済活動に携わったこともなく、多くの場合雇用されたこともなかったため、身の回りのものを売るか、稼ぎ手である夫または父親の不在の中、現地のインドネシア社会もしくはインドネシア人の親戚に頼ることで生きていくしかなかった。彼女たちの中には、収容してほしいと日本軍に頼むものさえいた。なぜなら収容されてしまえば、少なくとも雨風をしのぐ場所と割り当て分の食糧は保証されたからである。1943年に収容所の外に残された蘭印者人口のうち推定で80%が、何らかの経済的支援が必要な状態にあったという (Meijer 2004)。こうした状況下で、多くの蘭印女性が、職場において、または金銭的な援助と庇護を提供してもらえるような私的な関係という形で、日本人男性と出会うこととなった。

蘭印女性と日本人男性の関係

蘭印女性と日本人男性の親密な関係というテーマをめぐる微妙さは、蘭印者の歴史においてこのテーマがあまり触れられていないこと、またこれらの関係がしばしば売春というものに結び付けられ否定的な描写をされることに、如実に表されている。Bart van Poelgeestによる日本占領下の組織的な売春をめぐる詳細なレポート (1995) は、その具体的な例の一つである。彼は、残された資料の詳細な研究により、強制収容された蘭印・オランダ人女性および収容されなかった蘭印女性、そして (数が指摘されてないが) 大量のインドネシア人女性の、軍の売春施設 (慰安所) への組織的な徴募活動を解説してみせている。彼の報告によれば、一部の女性たちは「日本食のレストラン／売春宿で働くか、それとも日本人の愛人となるか、という選択肢」を与えられ、「多くの女性が売春宿で働くよりも、日本人の庇護者との安定的な関係を選んだ」という (前著 177)。彼の報告は、一方で売春をするという彼女たちの選択を自発的なものと解釈してよいのかは疑問であると指摘する点において、また他方で一人の日本人男性との長期的な関係も一種の売春であると言えるかもしれないと指摘する点において、思慮深いものといえよう。

しかし、蘭印女性たちの個人的な発言や彼女たちの日記と比較して、彼の報告はまだ公正を期しているようである。多くの報告が、ヨーロッパ系の女性は性的暴力の対象にならなかったと繰り返し断定しているものの (Brugmans 1960; Janssen 1995; Poelgeest 1995)、収容所の外にいる蘭印者の女性たちが、日本人男性による性的な接触や強制的な性行為の被害者となりかねない、という恐れは当時満ち満ちていた。居住地区において近隣者としての日本人の存在が大きくなっていく様子は、一部の人びとによって「日本人であふれかえる海に暮らしている」ようなものだと言われ、またいくつかの報告によれば、性的な接触の可能性を回避するために、若い女性たちを家から出さないようにしていたという。日本人男性と関係をもった女性たちは、「売春をした」とみなされ共同体を裏切ったとみなされた (Meijer 2004)。Janssen (1995) の引用によれば、ある女性は以下のように述べている。「もちろん、(収容所の) 外に残った女性で (終戦まで収容所の) 外にいた女性はいましたが、そのためにわが身を捧げることになったのです。日本人とつき合ってしまったことは全ては彼女たちの責任です。」 (前著 132)。こうした見方によれば、どんな境遇におかれた女性であれ、日本人男性と関係を持つようになった女性は、自らがとった行動ゆえに非難されるべきものとみなされた。またこのような解釈によれば、日本人男性は、必要とあれば暴力を用

いてでも、性的欲望を満たすためだけにそのような関係を結ぼうとしたのであり、真の愛情や慈善の精神、または同情が彼らの動機とみなされる余地はない。

当時の深刻な経済状況ゆえに、こうした関係がどの程度、経済的な必要からというよりは愛情から結ばれたものなのか、を判断するのは難しいものの、他の解釈、特にこうした状況と関係における女性の自らの意志、という解釈の可能性を認識することは重要である。Meijer（2004）が指摘したように、日本による占領とともに訪れた変化は、特に若者にとって、新しい自由と冒険をも意味した。父親が収容されると、彼らは新しい責任—男の子は父親の役目を引き継ぎ、女の子は家における保護を離れて働きに出る—を負うことになり、それは冒険をも意味した。当時は見合い結婚が珍しいとは思われなかったため、日本人男性との恋愛関係は一種の自己主張をも意味することとなった（例えばOord 2004の‘Meiske’の話を参照）。

また日本政府も、そして少なくとも一部の日本人男性たちも、こうした恋愛関係が真剣なものであるとみなしていた証拠がある。日本政府は、法的に結婚していた例はごく少ないにもかかわらず、こうした関係を敗戦後「国際結婚」と呼び、男性は妻子に対する責任を引き受けるべきだとし、またこれらの恋愛関係は日本軍の行動規範に反しているにもかかわらず、彼女たちを置き去りにするのは倫理にもとるとした（田村 1957）。一部の高官は、女性たちがパートナーと一緒に日本に行くことを、日本の深刻な経済状況—上流階級の植民地様式の生活と比べる由もない質素な生活様式—を理由に思いとどまらせる役目を命じられたが、これはむしろ明らかにパートナーと共に日本に行くという女性の決意をいっそう強くさせるだけであった。彼女たちは、パートナーが経済的な困難に直面するという想像に苦しみ、彼らを助けるために自分ができることをしたいと望んでいたという（桃李会 1947）。最近の研究によりますと100組以上が日本に帰還することとなった（倉沢 2011）。ただし、はっきりさせておくべきなのは、全ての関係がこれほど深いものであったわけではなく、妻子を遺棄して子供との面会を拒絶した父親もいた。それにしても以上の点を考慮すると、蘭印女性と日本人男性との間に子供をもたらしたこうした関係の、真の愛情からくるものを含めた、様相や動機の潜在的な多様性を認識することが重要である。

このように、日本による占領は、旧オランダ領東インドを政治的なレベルで占領しただけではなかった。日本による占領は、強制収容政策を通して、日系オランダ人がまさにそこから生まれ出ることとなった条件と矛盾そのものを創り出したのである。強制収容政策は、収容された人々（オランダ人および蘭印者）と収容所の外に残された蘭印者の間の区別を助長し、父親たちをシンガポール、ミャンマーおよび日本の強制労働所へと送り女性を収容所のそとで残して家族を分断し、また戦争の経験におけるジェンダーの差異を生み出した。多くの父親や兄弟が軍の一員として日本と闘い、日本の収容所で非人間的な生活および労働条件に苦しんでいた一方で、母親や姉妹たちは日本人に囲まれ、または日本人に頼って暮らし、安定した生活と保護を与えられる唯一の可能性にかけて日本人男性との関係を築いた。よって日本人の男性との関係は、国境を越え、女性の身体を「敵」に差し出しただけではなく、何よりも、捕虜や日本の収容所に収容された民間人たちのトラウマとなった経験に、真っ向から逆らうものなのである。恋愛関係がありうるということは、蘭印社会の日本による占領下の記憶と経験の中心をなす戦時下の敵意と敵という概念の形成と、矛盾するのである。戦争の記憶はこうして、統一の契機ではなくむしろ大きな軋轢を生むものとなり、また植民

地社会における人種および階級—そしてジェンダーをこれに加えるべきだろう—による区別をなぞるものとなる (Bosma, Raben, and Willems 2006)。この議論を巻き起こすような歴史から、日系オランダ人は登場するのである。

日系オランダ人の子供たち

本論文の中心をなす日系オランダ人たちは、1991年にオランダで設立されたJIN、つまり Vereiniging Japans Indische Nakomelingen (JIN) (第二次大戦中 (後) 生まれたインドネシア系オランダ人を母に日本人を父に持つ混血児の会)⁽¹⁾ の会員である。JINは日本人の子供同士の交流を支援する目的で創設され、社会における彼らの存在への理解を促進すると共に、日本人の父親を探し出す支援も活動範囲に含まれる。既に2つの研究が、姉妹組織である桜財団のメンバーたちの経験を紹介している (Buchheim 2008; ハユス・綿貫 2006)。本論文は、JINの会員および元会員合わせて20名への、2010年から2011年にかけて行った口述史インタビューが中心となる⁽²⁾。以下、まず最初に彼らのライフストーリーに基づいて女性と子供の視点から戦時下の母親と子供たちの境遇を描き出し、特に占領と強制収容政策が、彼らの生存条件と家族の生活、そして長期的な人生の軌跡にどのような影響を与えたのかを解説する。彼らの人生を形作った出来事や条件を把握したところで、次に「敵の子供」としての彼らのアイデンティティについて詳しく検討する。

日本による占領下の女性と子供たち

日系オランダ人の口述史における主要な共通項は、彼ら全員の母親が蘭印系で旧オランダ領東インドで生まれ育ったということ、そして彼らは日本による占領下においても強制収容されなかったということである。母親たちは全員蘭印系であり、彼女たちは平均的に植民地社会において比較的高い社会的地位をもつ家族の出であるようだ。これらの家族は政府の役職を占める上昇志向の高い階層であり、もしくは彼らの祖父が起業家であった。子供たちは家ではオランダ語を話し、オランダ人学校に通っていた。蘭印者の中でも、彼らは自身をかなり裕福な方であるとみなしていた。

前述のような日本による強制収容政策における人種およびジェンダー区分は、自活せざるをえない状況に女性を取り残したという点で、蘭印者の家族の日常生活に深い影響を与えていた。ほとんどの男性は蘭印軍に召集されたし、民間人もしくは軍人として強制収容の対象となった。家族は離ればなれになって、女性は安定した収入もなしに取り残されることとなった。日系オランダ人の母親たちの多くは当時独身で、自分の母親や姉妹と一緒に暮らしており、家族の収入を支えるために、外で働くことになった。また、結婚して子供がいた母親で、夫が不在の中ひとりで働き生計を立てていた女性も少数いた。女性たちは植民地時代には雇用されることがほとんどなかったのに比べて、

(1) 基礎となった組織であるJapanese Rootsが1994年に分裂し、Sakura FoundationとJINという同じ目的をもった2つの組織に分かれた。

(2) 匿名性を確保するために、全ての名前は仮名に変えてある。

占領下では生存条件が悪化する中、自活の手段を探るほかなく、こうして多くの場合、日本人男性との関係へと発展したのである。

日本人男性との関係は当然ながらそれぞれ異なる多様なものであり、私たちはこれらの関係の性質を判断する立場にない。しかし明らかなのは、日本による占領下において、日本人男性との関係は女性たちに対して保護を提供したということである。多くの口述史において裏付けられているのは、日本人の父親たちは経済的に厳しい時代に女性と女性の家族を養い、逮捕されないように守ったということである。一部の蘭印者も日本人との関係によって、強制収容を回避することができたという。経済的な窮乏を考慮すると、当然のことながら、こうした関係がどこまで合意に基づくものなのかを疑問に付すことになる。一部の女性たちはこうした関係が初めての恋愛関係であると述べ、また多くの女性たちが日本人のパートナーを、優しく、教育を受けた紳士（そのほとんどは軍高官、経済顧問、もしくはインドネシアでビジネスを展開する民間人のようだ）として描写するものの、強制的に関係を結ばされたという女性たちもいる。日本人男性との関係は家族を援助するものであったため、この場合において同意に基づくとは何を意味するのかを断定するのは難しいだろう。

しかし明らかなのは、母親たちや他の家族のメンバーの説明によれば、家族皆が父親が誰なのか知っており、また多くの家族がその父親と長期的な関係を結んでいた、ということだ。一部の父親たちは母親と同居するか、もしくは度々母親の元を訪れた。何人かの女性たちは同じパートナーを父親とする子供を二人以上もっており、これは交際期間が一年以上であったことを示している。一部の父親たちはパートナーや子どもたちに対して気遣いや愛情を示した。生まれたばかりのわが子を抱き、日本の名前をつけ、また何人かの父親たちは自分の家族を日本に連れて行こうとしていた。一部の母親たちは、日本の敗戦後に生まれた子どもであっても（つまり父親が不在の中）、父親の名前を子どもに受け継がせた。

1945年の日本の降伏は、これらの関係を突然に終わらせることとなった。日本人の民間人と軍人は、早急に逮捕されるかもしくは帰還させられ、時にそういった命令は十分な予告なしに下されたため、別れを告げる時間も与えられないことがしばしばあった。結果として、子どもたちは自分自身と母親に対する父親の思いが定かではないまま、残されることとなった。父親たちはさよならを言う機会を与えられなかったのだろうか？ 父親たちが手紙も残さなかったのは、そのような機会を与えられなかったからなのか、それとも妻子のことを気にかけていなかったからなのだろうか？

身内との再会——占領の終焉後の蘭印者の母親とその子供たち

日本の降伏は、蘭印者の母親とその子供たちの人生にとって、ひとつの大きなターニングポイントであった。日本による占領下においては、日本人男性との関係は保護を与えるものであったのに対し、戦争終了後における日本人の血を引く子供の存在は、日本による占領下で強制収容の対象となった家族や蘭印社会の中では、敵意を生み出すものであった。日系オランダ人の口述史は、収容された家族に課された厳しい生存条件、日本による占領下の捕虜に対する残虐な扱いといった、強

制収容政策によって創りだされた人種およびジェンダー区分によって必然的に生み出された家族内の緊張関係を、浮き彫りにしてみせる。

まず第一に、日本人の子供をもつ蘭印者の母親の多くは、家族の中で喪失とトラウマに直面することとなった。彼女たちの多くが、戦争中、戦闘行為によって、もしくは泰緬鉄道や日本の鉱山における強制労働が原因で、父親や兄弟を亡くしていた。収容から帰還した父親や兄弟たちは、当然のことながら、日本人の子供の存在に対して複雑な思いを抱くこととなった。一部の祖母たちは、厳しい戦後の状況に置かれたこれらの子供たちにとって、保護を与えてくれる存在であった。この祖母たちは、自分たちの娘の日本人のパートナーによって助けられた経験を持つため、その日本人のパートナーが「優しい人柄で、あなたはそれを誇りに思うべきだ」と主張し、敵意に満ちた環境の中で、孫たちに強力な援助と愛情を与えた。しかし、自分の夫や息子たちを失った悲しみから、日本人の孫に対する親愛の関係を拒絶する祖母たちもいた。例えばティリーさん（女性）は、3歳の頃から自分で洗濯しベッドを整え、家族のために買い物をしていた記憶をもっている。彼女は母親からも祖母からも愛情を受けることなく、反日的な戦争の物語に囲まれて育った。

次に問題なのは、多くの母親たちが戦争直後に結婚したことで一妊娠しているか、もしくは乳幼児の世話をしながら一、しかも、きまって捕虜となった記憶の新しい蘭印者の男性と結婚したことである。それにしても全ての男性が、トラウマ的な体験に突き動かされているわけではなかった。例えばロップさん（男性）の義理の父親は、日本による強制収容中に拷問を受けたとされているが、半分日本人である義理の息子に手を挙げたことはなかった。彼は「いつもお前を気にかけているよ」という言葉を残して亡くなった。ロップさんがこの言葉の意味を知ったのは何年後で、50代後半の時に自分の日本人としてのアイデンティティを発見した時であった。ウィリアムさん（男性）も義理の父親と心のこもった関係をもち、やがて、自分のルーツを探し、そして義理の父親が強制労働という戦争中の経験と向き合うために、一緒に日本を訪れた。

しかし他の多くのケースにおいては、子供たちは義理の父親による深刻な虐待と直面することとなった。子供たちは殴られたり罵られたりし、その後の人生においても身体的および精神的な傷を抱えることとなった。彼らは家族の中で差別されていると感じており、家族の中のスケープゴートもしくは厄介者であると感じていた。こうした家族の父親たちの中には、明らかに戦争のトラウマに苦しんでいる者もいた。フランスさん（男性）が言うように、戦争の経験が、彼の義理の父親から「礼節の境界」を見分ける能力を奪った。彼は義理の父親との関係を以下のように語っている。

「私の母は私が12歳の時になってやっと、私の日本人の父親について教えてくれた」何故なら、私は繰り返し殴られていたし、[義理の父は]私が出してしまうことを望んでいた。私を殺そうとしたと言うと言い過ぎですが。でも私はいつも、深い穴に落ちていき何もつかまるものがない先が見えないという、同じ悪夢を見ていました。私が5歳になる前から既に、義理の父は私を監視しており、私がどこかへ行ってしまうことを望んでいました。祖母が話してくれたのですが、彼は家に帰ってくると、誰か他人がいないか確認していたそうです。でも母と祖母はいつも私を助けてくれました。ある日、母が買い物に出かけました。義理の父がやってくる音を聞いて、私は家にあった大きなベッドの下に潜り込みました。いつもそ

うしていたのです。…そこで寝てしまうこともありましたが、そうすると母や祖母が探しにくるのです。しかし義理の父が私をある日捕まえると、大きな肥溜めのある庭に連れて行かれ…彼は私をそこに押し込もうとしました。この光景をいつも思い出します…ちょうど母がやってきて、もし母が来てくれなければ…一巻の終りだったでしょう。母は「やめて、こっちに來なさい！」と叫びました。私はこれを今も覚えています。…義理の父が死んだとき、これでとうとう彼がいなくなったと感じ、安堵のあまり泣きました。

虐待は耐えがたいものであったが、義理の父親はフランスさんの将来に対して野心的であり、勉学に励むよう強要した。しかし、フランスさんが上手く出来ないと、それが再び虐待的な扱いを引き起こすのであった。フランスさんは常に「バカ」呼ばわりされ、家族に何らかの災難が降りかかる度にそれについて責められ、辱めを受けていると感じていた。その一方で義理の父親は、まるでフランスさんの存在が彼自身の痛みとトラウマに向き合うための必要条件であるかのように、家を出て水夫になりたいというフランスさんの強い願望—フランスさんにとっては虐待を受ける関係からの逃避を意味した—を阻止した。意外にも、フランスさんは、義父の行動の原因を理解しようとしつつも、義父を憎んだことはなかったと語った。義父がフランスさんの援助に頼って生活するようになってからも、フランスさんは何らの復讐の気持ちを交えず、年老いた義父を介護した。結局のところ、彼の母親が彼を守ろうとし、彼女の元で庇護したのである。フランスさん自身、義父が自分を彼の子供として認め、フランスさんをインドネシアに置き去りにすることを母親に強要しなかった、と述べた。

他のいくつかのケースにおいては、子供たちは母親から引き離され、祖母や里親の元に、もしくは幼いころから一時的または長期的に養護施設に預けられた。これは多くの場合、母親が生活費を稼ぐ方法を模索し、そのため子供が小さいうちは親戚や寄宿学校に頼っていたことが原因であった。例えばシモネさん（女性）は、里親から里親へとたらいまわしにされていたが、とうとう彼女の幸福を気にかけていた彼女の叔父とその妻に引き取られることとなった。エレンさん（女性）の母親は日本人男性を父親とする子供を二人抱え、仕事と育児を両立することが出来ず、子供たちが小さいうちは親戚に頼ったりし、やがて養護施設に預けることとなった。他の多くのケースにおいては、母親の新しい夫が子供たちを受け入れることが出来なかったため、子供たちは親戚と、もしくは養護施設で暮らすこととなった。例えば生後数週間で養護施設に入れられたヤンさん（男性）は、その後もずっといくつかの養護施設や寄宿学校で暮らすことになった。彼の母親は近くに住んでおり、やがて彼は母親の存在を知ることとなるが、短時間の訪問でさえ母親の夫による暴力的な反応を買い、ヤンさんの存在自体が彼には耐えられないものなのだということが明らかになった。母親たちは決して悪い意図からではなく、他になすすべもなく子供たちを預けたものの、ほとんどの場合、長期にわたる別離と軍隊式の規律で縛られることが多い養護施設での生活は、子供たちにとってトラウマとなり母親との関係に緊張をもたらした。

より複雑なケースは、母親たちが戦争が始まる以前にオランダ人もしくは蘭印者の男性と結婚し子供をもうけた場合であった。彼女たちはほとんどの場合一人で生計を立てており、夫が収容されて不在の中、家計をやりくりしながら小さな子供たちの面倒を見なければならなかった。日本人の

子供を産んだことに対する周りからの敵意に加えて、夫の家族からの反発に直面することとなった。例えばロイさん（男性）の母親は、戦争が始まる前に結婚して二人の子供をもうけた。夫は強制労働所で亡くなった。彼女との間に子供をもうけた日本人の父親は、戦争中、母親と子供を援助し続けた。しかし戦争が終わった後、彼女の家族は彼女を勘当し、亡くなった夫の親戚が彼女から子供の親権を取り上げた。ロイさんは里親に預けられたが、後に母親が彼を探し出した。母親は再婚することなく、ロイさんと共にオランダで厳しい耐乏生活を送り、ロイさんが生まれたことによって母親が直面することとなった悲運が原因で、母親とロイさんとの関係は極めて緊張したものとなった。クララさん（女性）は戦争中に生まれたが、母親は戦前オランダ人の夫との間に数人の子供をもうけていた。戦争終結後に母親の夫が帰還すると、クララさんは親戚の手に委ねられ育てられることとなった。それでも、彼女の母親はクララさんもオランダに移住できるように計らい、夫には内緒でクララさんと連絡を取り合った。このパターンには例外もあったが——一部の子供たちは母親の最初の夫と一緒に暮らした——結婚した女性は、自分と子供たちを養い戦争中を生き抜いたという事実にもかかわらず、非常に大きな敵意の対象となった。

戦争終結後に母親たちと子供たちが直面した状況は、蘭印社会の中で、異なる経験によって引き起こされた不和、そして女性にとって戦中戦後を通して自分自身と子供たちを養っていく手段が限られていたことを強調してみせる。言うまでもないことだが、子供たちは幼少時代のこうした経験に、大きな影響を受けることとなった。このために母親や兄弟との繋がりを断ち切られることもあったし、家族内の葛藤は子供たちに身体的および精神的な傷を残した。まだ発達段階といえる年代でこうした状況に直面したことにより、彼／彼女らの人生の軌跡に長期的な影響を及ぼすこととなった。

子供たちの人生の軌跡

家族や生活状況によって、子供たちはそれぞれ異なる道を歩むことになり、彼らの境遇を長きに渡って左右するそれぞれの社会経済的な帰結を見ることができる。母親が結婚しないと決断した場合、子供たちは敵意に満ちた義理の父親と直面することを免れたが、その代わり、シングルマザー家庭としての経済的に困難な状況を味わい、社会的な孤立も経験した。特に家族からの援助がない場合、働く母親は当時非常に困難な状況で家庭を維持しなければならなかった。雨風をしのぐだけの家はあったものの、子供ながら飢えを感じていた子供たちもおり、彼らは老年になるまでパンくず一つも無駄に出来なかった。また遊び方や社会生活にも大きな影響を与えた。ロイさんは以下のように記憶している。「私の母がオランダ領東インドについての本を一冊持っており、これが私にとって唯一の玩具でした。そうです、私の幼年時代、玩具を買うお金もなく、その本だけが娯楽の元だったのです。私は何年もその本のページをめくっては見、今度はひっくり返して見ていました。」彼のこの叙述は、彼らがどんなに貧しかったかだけではなく、子供時代の社会的な孤立を、まざまざと想像させる。オランダへの移住後は、家族は国中に散らばり、シングルマザーを家族からの助けもなしに一人で生活させることとなった。当時オランダでは働く母親というのはまれであったため、彼女たちの多くは社会的扶助を受けるよう勧められた。

再婚した母親たちは、金銭的にはより安定した地位にあったが、蘭印者の男性たちは自分の持っている能力をオランダにおいて発揮することに困難を覚えていた。彼らの一部は、7～8人兄弟の大家族で育ち、父親代わりをしていたものもいた。義理の父親がもたらす収入にかかわらず、大家族の家計は逼迫していた。お尻のところに穴があくまでズボンははかなければならないこともあった。生活条件は逼迫していた。3つのベッドルームがあるアパートに、11人家族が暮らしていることもあった。家族全員が一緒に朝食をとるにはキッチンテーブルが小さすぎることもあった。母親の家族が旧オランダ領東インドで享受していた余裕のある暮らしとは対照的に、オランダにおける生活は、多くの人々にとって下方への社会移動と生活条件の厳しさを意味した。

結果として、特に日系オランダ人の男子は早くから働くことになり、中にはたった14歳から働く者もいた。自分の収入があるということは、複雑な家族関係から抜け出し逃げられることを意味した。彼らは食事のために家に帰ることもあったが、自分ひとりのねぐらをもつことが可能であった。他にも、敵意を向けてくる共同体から逃げ出したいと願い、水夫になったり軍に志願したりする者もいた。兄弟たちは大学への進学を目指すものもいたが、日系オランダ人の子どもの場合そのような例は稀であった。中には学校生活がなかなか大変だった者もいた。その中にはいじめと関係していたと見られる例もある。ある程度の年齢になってからオランダに移住した子どもたちは、インドネシアで教育を受けてきたためにオランダ語で優秀さを発揮することは難しく、彼らにとっては言語も問題であった。学校で優秀な成績をおさめた場合でさえ、高等教育を受けるための金銭的な余裕がなかった。ほとんどの場合、働きながら学位や資格を取るか、自分たちを「独学者」と見なしていた。しかし仕事の世界では、少なくとも男性にとっては、経歴から判断されてしまう代わりに、むしろ自らの努力によって認められるチャンスが与えられた。子ども時代の貧しい生活から抜け出し、家族により安定した裕福な生活を与えようと、ひたむきに仕事に打ち込み、ビジネスで成功し快適なライフスタイルを手に入れることが出来た者もいた。

しかし他のケースにおいては、おそらく子ども時代の経験と無関係ではない健康の問題が、彼らのキャリアを邪魔した。生涯続く健康問題に悩まされた者もいる。また、身体的もしくは精神的に深刻な健康問題が、離婚や家族の死といった人生を変えるような出来事がきっかけで、40代～50代になってから表れたケースもある。半世紀にも渡る静寂を破り、処理しきれていない過去が問題となって現れ、もはや無視することができなくなったのである。多くの者が、精神科医から、健康の問題を解決するための手段として、過去を見つめ直すよう助言された。この段階に達した多くの日系オランダ人が、自らの子供時代を振り返り、自らの日本人としての起源をたどり始めたのである。日系オランダ人たちは、自分のアイデンティティをどのように経験し、語り、そして受け入れたのだろうか？

出自を巡る課題

日系オランダ人が自分のアイデンティティを検討する際の主要な課題の一つは、彼らのアイデンティティが、自分たちにもハッキリと分からない何かにルーツを持つことである。通常のライフストーリーが、「どこで生まれたのか？ 両親は誰か？」といった質問から始まるのに対し、日系オ

ランダ人の場合、彼らが生を受けた経緯、父親の存在、両親の関係が多くの沈黙とタブーに包まれているのである。よって彼らのアイデンティティの出発点は、むしろ確実性の不在と自分たちの起源をめぐる社会的な緊張である。

自分の日本人としての起源を、幼い時期から知っていたのは、ごく少数であった。母親が子供を守ろうと、子供のアイデンティティを公の場で宣言することがあった。「ええ、彼女は日本人よ、だから何だっていうの?」。しかしこういったことは通例というよりは例外であった。他には、幼いころに母や親戚から教えられ、他の子供たちにいじめられるようになって、自分が日本人の親をもつことを知るようになったケースもあり、こうした場合、日本人としてのアイデンティティを否定したり隠したりすることもあった。しかしもっと多いのは、10代になってからやっと知るというケースであった。高校に入学する際に、家族に関する質問票を埋めなければならないため、シングルマザーの家族の場合、必然的に父親のアイデンティティが問われることになる。結婚する際にも出生証明書が必要であり、証明書が見当たらないまま、出自を巡る質問で暴露される者もいた。しかし、自分の母親からも教えられることなく、人生の後半になってから、ある場合など60代になってから、自分の出生について知ることになった者もいる。

自分のアイデンティティの中心をなす出自についての情報が秘密にされていたと知るのは、裏切られたという深刻な感情をもたらす。これは母親との関係にだけでなく、自己に対する見方にも、大きな影響を与える。彼らにとっては、今までの人生が嘘だったかのように思え、完全な情報が与えられないまま自分のライフストーリーを再構築しなければならなくなる。50代になって初めて自分のアイデンティティを知ったロップさんは以下のように語る。

私はいつも「義理の」父と母が早くに結婚しなければならなかったのだろう、と推測していました。彼らは1946年9月29日に結婚しました。私は1946年8月5日に生まれました。[彼らが結婚した時] 既に私は生まれていたのです。私は、こういうのを「できちゃった結婚」と言うのでしょうか、[母が妊娠していたために] 急いで結婚させられたのだと思っていました。…私が[私の妻と] 結婚したいと思った時…役所の人に両親の結婚証明書と私の出生証明書が必要だと言われました。…だから私は言ったのです。お母さん、出生証明書が必要なんだ、と。その時点で母は動揺していました。

出生証明書は見つからなかったが、役所に見せるために結婚証明書のコピーを渡された。彼の母親が亡くなってから数年後、彼の兄弟がその結婚証明書のコピーを見て、ロップさんには違う父親がいたのではないかということを発見した。彼の兄弟はこういった。

「ロップ、これをよく見たか?」私は「うん」と答えました。「何も気付かなかったのか?」と聞かれました。「気づいたのは彼らが結婚する前に私が生まれていたということ、彼らが書類を作って、私が母さんの子供であるということを認知しなければならなかったことでしょう。父さんの家族になるために、彼らは私を認知しなければならなかったんだ…」と私は言いました。「違う、お前は養子になったんだ」と言われました。「養子になった?」「そうだよ、

父さんはお前の父親じゃないんだ。お前のお父さんは日本人なんだよ。」まるで足元の地面がなくなったかのようでした。そして私の妹が言いました。「そうよ、本当はそうなの。」それは家族の秘密で、彼らはそれまで私に言わなかったのです。

彼のアイデンティティの発見に伴った一番の苦痛は、自分が日本人の子供であったという事実よりも、むしろ自分以外の家族が皆それを知っていながら彼には隠していたという事実であった。それは、裏切られたという深い感情を彼にもたらし、年をとるにつれて、彼は自分の人生そのものの「真実」を問うようになった。過去の全ての出来事、家族との関係は、今や問いに付され再解釈が必要なものとなった。彼の人生は、「知る前」と「知った後」という2つの顔をもつこととなった。彼は過去を知ったことで、確信をもたされたどころか、安定を奪われ、彼の人生そのものが問いに付されることとなった。こうして、彼の人生は一本の線でたどれるものではなくなった。彼の人生は、母親が結婚証明書のことと動揺したこと、なぜ両親が結婚するよりも前に彼が生まれていたのかという兄弟からの質問、といった「あの時に気付いていれば」「今になってやっと分かった」などといった点在する秘話からなるものであった。また彼はそれまで、自分の身長が兄弟たちよりもずいぶん低いことや、他の兄弟たちはお互いに似ているのに自分は彼らとそれほど似ていないことなどを、疑問に思ったことがなかったようだ。家族は信頼で成り立っているという安心は崩壊し、それは兄弟たちとの関係に大きな影響を与えることとなった。彼はもはや決して、自分自身の人生と自分の家族を、以前と同じようには見るができなくなった。彼のライフストーリーが変更されたことは、単なる再解釈ではなく、彼の家族との関係を永遠に変えてしまったのである。

自分が日本人であったという発見は、家族との関係を変えてしまったと同時に、強制収容を経験した家族の戦争の記憶、敵としての日本という戦争中のイメージと共に育った彼らにとって、矛盾をもたらした。

リチャードさん（男性）は以下のように説明する。

「自分が日本人の父親をもつことを初めて知った時」私は48歳でした。私は仕事で過労で倒れ、心臓発作ではないかと思われました。それと同じような病症でした。私は心臓に何らかの問題があったのですが、後にそれほど深刻なものではないことが分かりました。私はあらゆる専門家、心臓が専門の医師、内科医などの元をおとずれましたが、私が持っている病気が何なのか、誰も分かりませんでした。とうとう彼らが、私が「頭」に何か問題を抱えているのではないかと考えたため、精神科医を紹介されました。私はその精神科医とカウンセリングをし、彼はこう言いました。「あなたは日本の戦士、サムライのような人格を持っています。」彼はこのように説明しました。私は「一体どういう意味だろう？」と思いました。

私は自分が24歳だった時に、[義理の]父が私に何か話したがっていたのを思い起こしました。私は当時48歳、両親に電話をかけ言いました。「父さん、母さん、今夜僕のところに来ない？」彼らは私の家にやってきました。私は医者にかかっていることを説明し、こう言いました。「母さん、聞いて、父さんが私の本当の父親なのか、どうしても知りたい。そうなの？それとも違うの？」そしてこの時初めて、家族の大いなる秘密を知ったのです。私以外の家

族みんなが知っていました、そういうものなのです、よくあることです、家族の秘密というものは、いつも当人だけに秘密にされているのです…家族のみんなが知っている。私の場合もそうでした。こうして、私の父が日本人であるという家族の秘密を知ったのです。私はこれを受け止めるのになかなか大変でした。

なぜなら、まさにその時まで、日本は、こんな言い方をしたくないけど、敵だったからです。確かに日本はある意味で敵だったのです。つまり、戦争の記録映画を見るときなど…日本が負けて良かったと、そう思っていたのです。しかし今や、私はそういった記録映画を違うふうに見ます、少なくとも微妙な感情をもって。そして突然、自分には違う側面があるのだと思い知らされるのです、自分の知らない側面があるということを。まだ知らないことがたくさんありますが、私がどうして兄弟たちと違うのかを今は知っています。

このように、日本人としての出自を発見することは、深い混乱をもたらす。疑念や秘密が解決されたとしても、それらは矛盾に置き換えられる。つまり、自分が、憎むように教えられてきた敵の子供である、という矛盾だ。この点からすると、リチャードさんの物語はしごく穏当である。「残酷な日本人」についてよく話す家族に囲まれて育った者もいるからだ。ジェニーさん（女性）は以下のように説明する。「[日本による占領中] 多くの人々が亡くなりました。そう考えると、自分が存在していることに対して、罪悪感を抱くようになります。」こうして自己に対する感覚は深い葛藤の中に投げ込まれる。彼らは今や自分が何者であるか知っているが、自己に対する感覚が、拭い去ることのできないネガティブなイメージと結びついているのだ。

さらに言えば、彼らが自分の父親が日本人だと知ったとしても、何の答えにもならないし、知ったことによって崩壊した自己に対する感覚の代わりとなるような、確固たるものを何ら与えられないのである。父親の名前は？ インドネシアで何をしていたのだろうか？ 母のことを愛していたのだろうか？ どんな人だったのだろうか？ 私は父に似ているだろうか？ また一方で、さらなる情報が明らかになるという期待は、戦争中のネガティブなイメージを現実化してしまうかもしれないという恐怖を伴う。父親は戦争犯罪者として有罪になっているかもしれない。その一方で、こうした新しいアイデンティティの源に対する独特な見解が提供されることにもなる。家族関係が困難なものであった場合、ケアと愛情に欠けた家族生活は、愛情深い父親という存在に置き換えることができる。彼らはこう言い返すことができる。「彼らは私のことを気にしてくれなかったけど、私の本当の父は私のことを気にかけていた」。さらには、本当の父親が「善き人」であったかもしれないという期待は、戦争中のイメージを払しょくするようなポジティブなイメージを与えてくれることさえあり、そして子供は自分のアイデンティティを確保することができる。私は異なった存在だけれど、それは私が父親に似ているからだ、と。

しかし、さらなる情報の追求は、一層の緊張を生み出すこともある（例えばStuyvenberg and Liesker 2010を参照）。子供たちは自分が授かる前のことは分からないし、おそらく1歳にも満たない時に見た父親を覚えてはいないため、ライフストーリーを再構築し、また父親の人物像を確認するためには、身内や親戚に頼るしかなかった。しかしだからといって叔父や叔母に情報の提供を迫れば、彼らは居心地の悪さを感じることもなりかねなかった。前述のロップさんの叔母は、当

時健在で彼にいくつかのことを打ち明けたが、いつも同じ話を繰り返すばかりで、ロップさんはまだ他にも話されるべきことがたくさんあると感じていた。彼は以下のように説明する。

一方では私は、真実がどうであったのかを聞くことを控えています。まだ葛藤しているからです。私は知りたくもあり、知りたくないという気持ちもあります。多くのことが私をためらわせています。興味があると同時に、ないのです。葛藤しています。だからこそ多くのことを知っている人も、私に全てを話してくれないのです。でもそれも違うかもしれません。十分な情報を与えてくれない、多くのことを秘密にしている…そうやって叔母に迫ることによって、彼女に恥ずかしい思いをさせてしまうことになります。彼女を侮辱することになりかねません。年老いた叔母に向かって若い私がそんなことをしていいいものなのでしょうか。そんなことをしてはいけな。…彼女は黙っていなければならなかったということを恥じているのかもしれません。何か彼女に居心地の悪い思いをさせているのです。…私自身、強い反感を覚えました。だから、もう探ることをやめたのです。本当に不愉快な思いでした。

ロップさんの話は、自分自身の過去の再構築を取り巻く複雑な感情を説明してくれる。彼のアイデンティティを構築するために家族に頼ることで、自分の家族の評判を傷つけたり、過去を否定したりすることになりかねなかった。知りたいと熱望しながらも、さらなる情報の追求はまるで相手に付け込んでいくかのように感じられ、家族の秘密に挑戦することにもなった。しかし、秘密を明らかにすることもまた、家族の恥となりかねないものとみなされた—ロップさんの母親は、言ってしまうと、未婚の母であったのだし、日本人の子供を産んだのだから。こうした懸念はいわれのないものではなかった。日本への訪問やより意識的なアイデンティティの追求と主張によって、家族関係が悪化したケースも多いからだ。さらには、そもそも秘密にされていたがために裏切られたと感じたのだから、その後の探求には疑念がつきまとうこととなる。何年もの間、私に対して秘密にしてきたのだから、今さら彼らが真実を語っているとは限らないのではないかと。よって多くの疑問に対する答えの追求は、引き裂かれた感情を伴い、ほとんど安定をもたらしてくれない。「秘密」が明らかになった後でさえ、日本人としてのアイデンティティの確立と追求は、家族の存在と様々な不安と深く絡み合ったままとなる。日本人としての過去の探求は、語られることのなかった個人の過去を明らかにするから、という理由だけで論争を巻き起こすわけではない。日本による占領についての、家族そして共同体の言説を作りかえそれに挑戦することになるが故に、懸念を伴うものなのである。

日本を訪ねて

彼らの存在意義とアイデンティティの追求に伴う、数少ない肯定的な経験のうちの一つ、そして日本および日本人であることについての、彼ら自身の物語にとって重要なターニングポイントとなるのが、日本への訪問である。2001年以来、日本政府は、元々は捕虜となったオランダ人との和解策の一環として、日系オランダ人にも日本を訪れる機会を保障してきた。彼らが語る訪問の様子

は、その訪問が、アイデンティティと自己に対する感覚に対して、どれほど大きな感情的影響を与えたかを証明してくれる。この日本への訪問は、戦争の記念碑の見学、外交担当者との会見などと同時に、京都における文化体験および小学校における「国際交流」などを中心とするものである。すべてが用意されたツアーであり、ガイドと通訳が付き添い、VIP待遇される一飛行機はビジネスクラス、最高級のホテルと食事、サービス。彼らによる体験談のほとんどにおけるキーワードは、この旅がまるで「家に帰ってきた」かのようなものであった、というものである。2002年に日本を訪れたエリックさん（男性）は、日本の地を踏んだのはその時が初めてであり、以下のように話す。

少し誇張しているように聞こえるかもしれませんが、成田空港に到着した時、私はまるで家に帰ってきたかのように感じました。自分が自由だと感じ、再び家に帰ってきたのだと感じ、自分の家では何でも好きなことができるし、それが許されているのです。日本政府はこの旅のために完璧な準備を整えてくれました。ガイドは私たちのために何でもしてくれました。すばらしい旅でした。

この場合、「家」とは何を意味するのだろうか？ 彼が、かつて一度も踏み入れたことのない土地で、一体どうして「家に帰って来た」ように感じられるのだろうか？ エリックさんの説明によれば、「家」とはこの場合、より抽象的な意味をもつのであろう。つまり、そこにいれば安全で自由である、と感じられる場所という意味であろう。実際には国としての日本にはなじみがないものの、この旅は少なくとも、日本人であることが正当なこととして認められる場所を訪れるという、めったにない機会なのだ—反日感情におびえなくてすむ場所、またはアイデンティティを隠さなくていい場所への。さらにいえば、ファーストクラスの扱いによって、日系オランダ人として尊重されているというめったにない気持ちを抱くことになり、それは彼らが育った社会で直面した扱いと、実に対照的なのである。日本政府が彼らを招待し、旅にかかる費用をすべて負担するという事実もまた、彼ら自身、そして彼らの苦しみが、日本政府によって認識されたということを象徴的に強調するのである。

尊重と承認に加えて、外見が似通っているということもまた、重要な役割を果たす。彼らの多くは、訪問した小学校で出会った子供たちに、自分たちの子供時代の面影をみることができ、また店やレストランで日本人と間違われるという事実には驚くのである。これは彼らのアイデンティティが肯定的に受け止められるというめったにない機会であり、それは独特の帰属意識を生む—彼らはもはや孤立していないのである。こうした旅が彼らにとって癒しとなったことは疑いようもない—彼らは所在のなさから解放され、自分の出自を知り、戦争のイメージとは対照的に、現代的で繁栄し、きちんとした「清潔な」国の一員でありその国に帰属しているということを感じられるようになる。

残念なことに、日本への訪問がしばしばもたらす非常にポジティブな影響にもかかわらず、多くの場合、確かな安堵の気持ちを感じはしても、完全に心の整理がつくことはない。国に帰っても、自分たちの旅の話を身内や周りの人々と大々的に語れる者はほとんどおらず、彼らが日本人としてのルーツを探しに行ったという事実は、兄弟や家族のメンバーからの冷ややかな反応をもたらすこと

もある。日本で家族をたどることに成功した場合であっても、そして日本の家族に会うことができたとしても、日本人の父親やその子供たちからの疑念の目を向けられることもある。しかし他の場合は、日本人の父親の家族を見つけることができず、自分の出自やバックグラウンドの空白を埋めることができない者もいる。少しは前進しても、埋めるべき多くの空白が残されたままなのである。

語ること、語れること

このようにして、日系オランダ人のアイデンティティの探求は、ほとんどの場合、自分たちの日本人としての起源を取り戻すことと共に、日本において本当の父親を探すことに焦点が当てられる。しかし、日系オランダ人の起源の民族적および歴史的な複雑さによって、彼らの口述史は、一体日本人であるということが何を意味するのか、何をそしてどのように言葉で表現し主張するべきなのか、といった疑問を呼び起こす。

彼らが日本人であるということは、文化的または民族的な伝統という意味で日本を発見し「日本人である」ことを確認すること、もしくは国家への帰属などといったことがそれほど重要なわけではないようだ。むしろ、自分の過去にまつわる沈黙と空白、不確かさ—日本人であることによってもたらされたもの—と向き合い、これらと共に自分史を構築することができるということに、意味があるように思われる。不完全な知識に基づき、我々がライフストーリーを語るときに当たり前のように思っている確実さ—両親の存在、母親や父親との絆—が不在である中、アイデンティティを主張し、不確かさから出発してライフストーリーを語ることが出来るのだ、ということが重要なのだ。自分が主張し帰属する国や文化、自分が受け容れられる共同体。一体どのようにしてライフストーリーが語られるのだろうか？

エリックさんの話は、そのような条件下でライフストーリーを語る際の課題を明らかにしてくれる。エリックさんには子供時代の記憶がほとんどなく、覚えているのは寄宿学校に住んでいたことで、寄宿学校の軍隊式の規律や、母親と家族との繋がりがなかったことにより、それは今でも心に傷を残していることとして記憶されている。また10代の頃にオランダ語もあんまり話せないままオランダに移住したことも彼の人生に大きな影響を及ぼし、言葉が出来なかったために学校では成績が良くなく、14歳の時から働き始めることになった。また、父親についての情報がほとんどなく、母親も父親のことを口にすることがなかったため、自分が日本人の血を引くことを知ったのは、健康に問題が発生した人生の後半になってからであった。こうしてエリックさんは、家族がいるという感覚や自分の出自についての知識—多くの空白—が欠けたまま、現在に至るまでその影響を引きずっている。これらは、当時の社会的な状況によって母親が彼を寄宿学校に預けなければならなかったこと、そして彼の日本人としてのアイデンティティと、明らかに関係がある。彼が自分自身について語る機会を与えられたフォーラムにおいて、一体何を話したかったのか、という質問に答え、彼は自分のアイデンティティの表現の仕方やその過去との関係をめぐる問題と苦痛を説明してくれる。

私は、自分の幼少時代を失ったということを言いたかったのです。公の場で語り、質問に答えることになるだろう、とは分かっていました。問題は、私が語るべきストーリーをもっていない、ということです。私はただ何もいえず何も説明できないのです。私はこう言いたかった。私は全く興味深い人物ではありません。何故なら、私にはあなたがたに語るべきストーリーがないからです。私の父親が日本人であるがために、義理の父親は私を虐待しました、などと言えないのです。私は収容所にいました、とも言えません。何も言えないのです。私が聴衆に向かって言えるのは、人生の最初の12年間に寄宿学校で過ごしました、ということだけです。他には何もありません。初めてオランダに移り住んだ時、オランダ語が話せなかったことも。でも、それは興味深い話ではありませんし、皆が聞きたいことではないでしょう。彼らは私がオランダ語が話せるか否かなど、知りたくないのです。そう思いませんか？ つまり、そういうものでしょうか？ 違いますか？ つまるところ、私にはストーリーがないのです。しかし、それは未だに困難な経験です。自分の日本人の父親のことが原因で、義理の父親に殴られたために足を引きずって歩いていたらよかったかもしれません。それなら興味深い人物であるというふりが出来ます。それなら聴衆の前に座って、ストーリーを語ることが出来ます。しかし、実際にはその場に立っても、何も言えないのです。聴衆に向かって、私は何もないということを言わなければなりません。私には何もないのです。彼らは私が心臓発作を起こすことを知ることができないでしょう。もし知っていたとしても彼らは「それが出自のせいだと」わからないでしょう。私が心臓発作を起こしたのは、父親が日本人であるからだとは思われないでしょう。

私が彼に、自分の日本人としての出自を感じるのはどんな時であるかを聞くと、彼は以下のように説明した。

私の日本人としての出自を感じる時は、周りの人たちが、親族や家族、そして特に父親との思い出話を話そうになったときです。私の場合はどうだったのだろうか、と振り返るようになります。しかし私は当然ながら決して答えを見つけることが出来ず、そして永遠に見つけることが出来ないのです。

結 論

エリックさんの「ストーリーがない」ストーリーと、彼が自己に対する感覚の中心における欠如と空白を強調することによって、断片と欠如によって特徴付けられる人生との折り合いをつけるのには限界があるのだ、ということが浮き彫りになる。それは戦争についての既存の歴史的な口述に疑問をもたらすだけでなく、彼自身の経験を語り表現することによって、ライフストーリーの記録というジャンルそのものも疑われるのである。それは、完全な自己像を提示したい、そして、「日本人」であれ「虐待の犠牲者」であれ、心の整理を何らかの形で可能にするような、そしてライフストーリーに欠かせない基本的な要素、つまり出自や共同体、家族の歴史などといったものが

全く欠如している状況においてさえ「何か」を表現するための、認識されうるカテゴリーを主張したい、という過剰とっていいほどの熱望を明らかにしている。では私たちは、日系オランダ人のアイデンティティをどう理解するべきだろうか？

日系オランダ人のアイデンティティを考察する際にポイントとなるのは、彼らの民族的もしくは国家的な起源の「本質」を見つけることではない。むしろ、彼らのストーリーは、戦中戦後における正当な要素としての自己の存在を主張するために切り抜けなければならなかった、社会的および多面的なコンテキストを明らかにしてくれる。それは、彼らのライフストーリーと、彼らが暮らした共同体および家族のストーリーが、互いに深い関わりがあることを明らかにしてくれる。

そもそも、彼らの存在は、占領者と被占領者との間の敵対関係と真っ向から衝突することによって、蘭印社会の戦争の記憶と、互いに深く絡み合っている。蘭印社会の戦争の記憶も少しずつではあるが変化し時間と共に変わっていく。日本人の子供の団体が存在するという自体、日本による旧オランダ領東インドの占領についての、現代における口述史の困難さが緩和したことによって可能となった、歴史的な産物なのである。団体を組織しようという動きは、以前は脅迫されたものであった。日系オランダ人が発言力をもち、公の場で自分たちのアイデンティティについて話せるようになったのは、ここ10年～20年間のことにすぎない。

蘭印女性と日本人の恋愛関係をめぐる論争はまた、女性が直面した矛盾、そして戦争の経験と記憶におけるジェンダーの視点を、明らかにする。女性たちがその行動ゆえに責められ、「売春」をしたとみなされることは、蘭印者の女性の葛藤よりも、強制収容された捕虜と家族の苦しみを重視するという、日本による占領の歴史と記憶がもつジェンダー性質を明らかにする。よって日系オランダ人の口述史は、半世紀以上も沈黙に包まれていた戦争の記憶におけるジェンダー要素を認識させてくれる。

さらに、本当の父親、そして両親が出会った経緯の「真実」の探求は、日系オランダ人が口述史を語るということが、蘭印社会の歴史を語ることに関係するだけではなく、家族の評判やジェンダーの規範と対立するものでもある、ということを示している—なぜなら、日系オランダ人であることの発見は、母親の評判を「傷つけ」、戦争中の家族の経験や立場についての既存の物語を変えてしまうからである。この場合、ライフストーリーを語るということは、家族と共同体の戦争中の経験についての口述史を変えてしまうことを意味し、結果として非常にパーソナルなレベルにおける記憶との痛ましい葛藤を生む。この場合、自分の存在を主張することが、他者の口述史と他者との関係に直接的な影響を及ぼすのである。これこそが、彼らが自分のアイデンティティを語ることがこれほどまでに難しいことの理由である。日系オランダ人としてのアイデンティティは、自分が誰であるのか、自分がどこから来たのかをめぐめるものではないのだ。それは自分自身の発見や自分の民族的な出自を定義することではなく、むしろ家族の意味、女性と子供の戦争中の経験、そして彼女たちの第二次世界大戦中の歴史と記憶における立場をめぐる葛藤なのである。

（えざわ・あや ライデン大学日本学部准教授）

（かわさき・あきこ NPO法人Bridge Asia Foundation）

【参考文献】

- Anderson, Benedict. 1991. *Imagined Communities*. New York: Verso.
- Bode, Sabine. 2004. *Die vergessene Generation: Die Kriegskinder brechen ihr Schweigen*. München: Piper.
- Bosma, Ulbe., Remco. Raben, and W. Willems. 2006. *De geschiedenis van Indische Nederlanders*. Amsterdam: Uitgeverij Bert Bakker.
- Bosma, Ulbe and Remco Raben. 2008. *Being "Dutch" in the Indies: A History of Creolization and Empire, 1500-1920*. Athen, OH: Ohio University Press.
- Brugmans, I.J. 1960. *Nederlandsch-Indië onder Japanse bezetting: gegevens en documenten over de jaren 1942-1945*. Utrecht: Franeker.
- Buchheim, Eveline. 2008. "Hide and seek': Children of Japanese-Indisch parents." in *Forgotten Captives in Japanese Occupied Asia*, edited by K. Blackburn and K. Hack. London: Routledge.
- Ericsson, Kjersti and Ewa Simonsen. 2005. *Children of World War II: The Hidden Enemy Legacy*. Oxford: Berg.
- Gouda, Frances. 1995. *Dutch Culture Overseas: Colonial Practice in the Netherlands Indies, 1900-1942*. Jakarta: Equinox Publishing.
- Janssen, Wendy. 1995. "De vrouwelijke held: Indische vrouwen over de Japanse bezetting." pp. 127-138 in *Het Einde van Indië*, edited by W. Willems and J. d. Moor. 's Gravenhage: Uitgeverij Koniginnegracht.
- McClintock, Anne. 1996. "No Longer in a Future Heaven: Nationalism, Gender, Race." in *Becoming National*, edited by G. Eley and R. G. Suny. Oxford: Oxford University Press.
- Meijer, Hans. 2004. *In Indië geworteld. De twintigste eeuw*. Amsterdam.
- Oord, Steffie van den. 2004. *Liefde in oorlogstijd*. Amsterdam: Pandora.
- Parker, Andrew, Mary Russo, Doris Sommer, and Patricia Yaeger. 1992. *Nationalisms and Sexualities*. New York and London: Routledge.
- Poelgeest, Bart van. 1995. "Gedwongen prostitutie tijdens de Japanse bezetting." pp. 173-187 in *Het Einde van Indië*, edited by W. Willems and J. d. Moor. 's Gravenhage: Uitgeverij Koniginnegracht.
- Renan, Ernest. 1996. "What is a nation?" in *Becoming National*, edited by G. Eley and R. D. Suny. Oxford and New York: Oxford University Press.
- Stuyvenberg, Jan van and Hans Liesker. 2010. *Kinderen op kousenvoeten: Ervaringen bij het opsporen van Japanners en Koreanen die tijdens de Tweede Wereldoorlog op Java waren*. Zoetermeer: Free Musketeers.
- 倉沢愛子, 2011『戦後日本＝インドネシア関係史』草思社
- 田村吉雄編, 1957『秘録：大東亜戦史7 蘭印編』富士書苑
- 桃李会, 1947「座談会：国際結婚結婚はどうなったか」『桃李会会報』第3号（11月）：1-16頁
- ハユス・綿貫葉子, 2006『私は誰の子？父親探し求める日系二世オランダ人たち』梨の木舎